

「2015年シドニー大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学農学部・4年 藤井温子

●オーストラリアは移民大国

まず、シドニーに到着して私が驚いたのは人々の多様性だ。人々が行き交う通りを見渡せば、アジア系からヨーロッパ系まで様々な顔が目に入る。オーストラリアでは、中国、韓国、東南アジア、南北アメリカ、ヨーロッパの国々など様々なバックグラウンドを持った人たちが巧みにオージーアクセントの英語を操り暮らしている。日本人が構成員の98%以上を占める日本で生まれ育った私にとっては、このような民族の多様性が混沌と渦巻くオーストラリアは対極の存在であった。これらの人々は、時には交わり、時には交わることなく静かに共存しているように見えた。おそらく短期滞在の者には見えない民族の間での感情のぶつかりなどは存在しているのだろうが、想像をはるかに超えた多様性に驚き、様々な民族を受け入れるオーストラリアの器の大きさに感心した。少し話は飛躍するが、オーストラリアとは成り立ちが全く異なる日本でも、人口減少のためにいつかこのように多くの移民を受け入れる時が来るのではないかと考えていた私は、日本もオーストラリアに見習うべきところがあるのではないかと感じた。

●プログラム内容

プログラムでは、オーストラリアについて学ぶものが多かった。日豪の比較をテーマにしたプレゼンテーションやエッセイ、アボリジニーの文化、オーストラリア建国の歴史など、日本と全く異なる成り立ちや文化をもつオーストラリアのことを学ぶのは大変面白かった。英語の授業や日常生活を通して、自分の英語力の圧倒的な不足を感じるとともに、日本ではなかなか危機感をもつことができない英語の必要性を痛感した。

また、プログラムでは様々な人のお話を伺うことができた。シドニーで会社を立ち上げたマーケターの方の講演や日本文化発信を行う独立行政法人である国際交流基金の方とのお話を通して、日本と世界（オーストラリア）をつなぐ仕事の実際を少しでも見ることにできたように思う。

●自分への影響

このプログラムを通して受けた影響はいくつかある。まずは、自分は英語をもっと自由に操れるようになりたいのだと気づいたということだ。今の日本では、英語ができなくても生活には全く不自由がなく仕事に困ることもないので、やりたくない人はやらなくてもいいと私は考えている。しかしながら、この滞在を通して自分は英語を身に着け日本語を話さない人たちとも関わっていきたい人なのだという事を強く認識した。この気持ちを忘れずに、これからの姿勢に反映していきたいと思う。

また、オーストラリアで留学や仕事をしている人と話をする中で、自分がやりたいことを一生懸命やるのが大切だと感じた。自分の意志を持って海外に飛び出した人たちの姿勢は、日本にしようとしてどこにしようと思わなければならないものがあると思った。

●まとめ

2週間という短期の滞在であったが、たくさんを経験させていただき感じることも多くあった。このような機会をくださった京都大学およびシドニー大学の方々やプログラム中に関わってくださった方々に感謝したい。